

読みの交流における授業者の役割—「山月記」の学習

増田 知子

基調提案に挙げられているように、「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)の視点からの学習過程の改善」が注目されているが、この場合の「深い学び」とは具体的にどのようなものであろうか。本校の国語科で昨年度までの3年間、「知識基盤社会」に対応する「総合的に考える力」を身につけさせることを目指して授業の中で行ってきたのは、結びつけて考えるということであったが、そうすることによって得られる「深い学び」というものもその一つであると考えている。

「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)」を目指す授業の中で読みの交流をさせていて感じるのが、学習者個人の学びは深まっているのかという点である。たとえば「山月記」を授業で扱う時、主題について考えさせることが多い。授業者が一つの主題にしばることは主体的な学習にはならないと考え、読みの交流を行う。そこで学習者は自分とは違う読みを知ることにはなるが、その様々な読みをすべて認める中で、はたして学びが深まっているといえるのかということである。多様な読みを認めるといっても、その読みの根拠を示させることは必要であると考え、このたびは主題を考える上での根拠にするように、「人虎伝」との比較を学習活動の中に入れ、次のような学習過程で授業を行った。

第一次 「山月記」の読解

第二次 「山月記」と「人虎伝」の比較

第三次 第二次でまとめた表を持ち寄り、「山月記」で作者が伝えたかったことを班に分かれて考える。(「人虎伝」との比較を根拠にする。)各班から出されたレジュメを読み、班ごとに紙面で質問する。質問を受けた班は紙面で返答する。

第四次 「山月記」で作者が伝えたかったことをまとめる。このたびの学習について感想を書く。

学習過程の第四次で学習者が書いたものを見ると、班ごとに考えをまとめ、それに対する質問をやり取りする中で、考えがあいまいだったことに気づいたというものや、様々な意見を通して自分の意見を見直すことができたというもの、また、この学習によってさらにこのお話がわからなくなったというものが見られた。自分の読みが交流によって揺さぶられたという点で、一定の成果と考えることもできるが、学びが深まったかどうかについては、各学習過程での活動を分析し、考察していく必要がある。

主体的な学習を活かしながら学びを深めるには、「山月記」の学習では具体的に授業者のどのような働きかけが必要なのか。テキストの表現を結びつけること、「人虎伝」と比較すること、学習者から出された読みを対立させること等によって得られる「深い学び」というものに着目して考えていきたい。